

能楽研究 22巻 : 奥付

雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	22
ページ	246-246
発行年	1998-05-25
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020515

〔編集後記〕

『能楽研究』第1号は昭和49年10月の発行である。昭和27年に能楽研究所が発足してから二十年以上を経てようやく紀要を出せたわけで、その時の喜びは今も忘れ難い。その創刊号に98頁に及ぶ「多武峰の猿楽」を発表して以来、定年退職した平成9年度分たる本号まで、私は毎号に長文を載せ続けてきた。個人的な論考、研究所の仕事でもある資料調査の報告、科学研究費の交付を受けた共同研究の成果報告、展望など、内容はさまざまであるが、表章の名を出した分のみを数えても総計二〇三二頁に及ぶ。四十七年間にわたった能楽研究所での研究生活の後半の成果のほとんどを『能楽研究』に発表した形であり、長い論考でも書けば発表できるとの確信が、次々と大きな課題に挑戦する勇気を与えてくれたことなど、『能楽研究』が私に与えた恩恵は計り知れない。最後になるであろう編集後記に、そのことを明記し、感謝したい。

執筆だけではなく、編集の実質上の責任者も毎号私だった。第一号の巻頭を香西精氏の論考で飾ったのを初め、3号に小山弘志氏、5号にP・G・オニール氏、8号に中嶋利雄・松岡心平両氏、10号に橋本朝生氏、11・13号に落合博志氏、12号に永井猛氏、17号に関栄司氏、20号に小林健二氏に寄稿願ったほか、『四座役者目録』研究会の成果を天野文雄・表きよし・牛尾美江・山中玲子・三宅晶子の五氏に発表してもらった。所員以外の方への執筆依頼が本誌の内容を著しく多彩にしたと、自画自賛している。御協力を賜った諸氏に御礼申し上げる。

本号には、展望や報告も含めると、能楽研究所の実質上の研究スタッフ全員が執筆している。私の退職を記念する号にしたいとの意向に基づくことであるが、表紙にそう銘打つのは辞退した。故古川久先生の退任を記念して全所員が論考を書いた第6号の例にならうてのことである。

懸案だった研究展望の遅れがあと一年にまで回復したのは喜ばしいが、年度内発行は今回もまた実現しなかった。所員が多忙を極める年度末を目標にすること自体に無理がある。夏休み執筆・十月発行を恒例化するように勧告しているが、自身が行えるか否かがまずあやしい。などと言うのは、退職後も寄稿させてもらうつもりでいるからである。(表章)

一九九八年五月二十五日 発行

能 楽 研 究 第二十二号

102-8160 東京都千代田区富士見二一七-一
 〇三三三六四九八二五、三三三三六四九八二七
 (FAX) 〇三三三六四九六〇七

編集兼 野上 法政大学能楽研究所
 発行者 記念

所長 西野 春雄

印刷所 三和印刷株式会社
 長野市川中島町一八二二一